

クロード・ロランからナショナル・トラストへ

—湖水地方のガイドブックにみられる自然観の変遷

From Claude Lorrain to the National Trust : Views on Nature in the Guidebooks for the Lake District

今 村 隆 男

Takao IMAMURA

2004年10月8日受理

1

今日、イギリス北西部に位置する湖水地方は、年間およそ1200万人が訪れる世界有数の観光地である。ツーリストがこの地を訪れる目的は多岐にわたるが、その中心をなすのは湖水地方が有する湖と山の織り成す多様な風景美を山歩きをしながら楽しむことである。興味深いことに自然の風景を楽しむというこの旅行目的は湖水地方へのツーリズムが始まった18世紀半ばから変わってはいないが、風景の見方には当然のことながら大きな変化があったはずである。それゆえ、この地へのツーリスト達がどのように風景と接して来たのかを探ってみることは、イギリスの国内ツーリズムの歴史の一端を知る上でのみならず、イギリスにおける自然観の変遷を知る上で重要な鍵を提供してくれるものと考えられる。本論では、その際の有効な手がかりとして、ツーリスト達が携えて行ったガイドブックに焦点を当て、今日に至るまで250年以上の間にわたって出版されて来た湖水地方をめぐるガイドブックの中から主たるものを年代順に取り上げて、この問題を考察してみたい。

2

18世紀のツーリズムを研究しているウーズビーによれば、イギリス社会が安定した中世以降、カンタベリーなどへの巡礼の旅が続いたあと、近代的な意味でのツーリズムが始まったのは18世紀半ばであり（Ousby 9）、イギリスにおける近代のツーリズムの発祥の地の代表的な場所として彼があげているのが湖水地方である。その前の17世紀からイタリアやフランスなどを目的地にした所謂グランド・ツアーが盛んになるが、これは上流階級の子弟を中心にした一部の富裕層による「紳士として必要な知識」を身につけるための特殊な旅行形態であり、これをもってイギリス・ツーリズムの開始とは言えないだろう。グランド・ツアーを支えた特別に富裕な貴族とは比べるべくもないが、国内旅行なら可能という経済力を蓄えた新興市民階級が18世紀にはいって台頭して、大陸の政治的な事情やイギリス国内の交通網の発達、大陸諸国への文化的劣等感か

らの脱却などを背景に、湖水地方などへのイギリス国内の観光地へのツアーが盛んになってイギリスにおける本格的なツーリズムが始まったと言える¹。

初期の湖水地方のガイドブックや旅行記などといったトラベル・ライティングのビブリオグラフィーをまとめたビクネル（Peter Bicknell）が最も早い例としてあげているものは、いずれも18世紀半ばに書かれた、ベラーズ（William Bellers）による『北イングランドの六景』（*Six Select Views in the North of England*, 1752）、ドールトン（John Dalton）の『ホワイトヘブン近郊の鉱山見学から帰った二人の貴婦人のための風景詩』（*A Descriptive poem, addressed to two ladies, at their return from viewing the mines near Whitehaven*, 1755）、ジョン・ブラウン（John Brown）の『カンバーランドのケズウィックの湖の描写』（*A Landscape of the Lake at Keswick in Cumberland*, 1767）の3点であるが、これらの作品はガイドブックというジャンルがどのようにして誕生してきたのかという問題を明らかにしてくれる。

ベラーズのものは6景のうち5景がダーヴェント湖などの湖水地方の風景を描いた版画であり、ワーズワス（William Wordsworth）の『湖水地方案内』の1810年初版（*Select Views in Cumberland, Westmoreland, and Lancashire*）にもみられるように、風景版画とその解説を軸にガイドブックを作り上げる手法の出発点となったものである。また、その描き方は、「最も忠実に（*“with the greatest Accuracy”*）」（Bicknell 22）描かれた風景であると当時の新聞広告は伝えているが、実際はクロード・ロランらの17世紀イタリア風景画を範とした、つまりピクチャレスク趣味にのって理想化・定型化された風景画の最初のものであり、この点においても18世紀後半の湖水地方ガイドブックのひとつの流れを形作るものであったと言える。

次のドールトンは、この地の鉱山で財をなした人物の姉妹に宛てた形で書かれた風景詩である²。この作品が取り上げている北部のダーヴェント湖とその隣のケズウィックの谷は、上記の3作いずれもがこの地の風

景を取り上げていることからわかるように、当時広い湖水地方の中で最も人気のあった場所であり、その人物の領地であったラウザー (Lowther) の森林風景などと比較しながら、ピクチャレスク (picturesque) 趣味特有の用語を使って風景を描写した最初の詩作品である。

その描写内容においてこれら以上に大きな影響を残したのが、知り合いの貴族に宛てて書かれた書簡からの抜粋を出版したブラウンの『カンバーランドのケズウィックの湖の描写』である。その中で、ブラウンは「ケズウィックの湖」、即ちダーヴェント湖の魅力を「美と恐怖と広大さ」(“BEAUTY, HORROR, and IMMENSITY”) の三つが完璧に交じり合ったものであるとして、次のように述べている。

… to give you a complete idea of these three perfections [BEAUTY, HORROR, and IMMENSITY], as they are joined in KESWICK, would require the united powers of CLAUDE, SALVATOR, and POUSSIN. The first should throw his delicate sunshine over the cultivated vales, the scattered cots, the groves, the lake, and wooded islands. The second should dash out the horror of the rugged cliffs, the steepes, the hanging woods, and foaming water-falls; while the grand pencil of POUSSIN should crown the whole, with the majesty of the impending mountains. (Brown 8)

「第一」の魅力、即ち穏やかな風景の「美」、はクロード・ロランに、「第二」の魅力、即ち急峻でごつごつした風景から来る「恐怖」感、はサルバトール・ローザに、「第三」の魅力、即ち全体の風景の「広大さ」、はガスパール・プッサンに、各々匹敵するとして、これら三者の融合が風景美に不可欠のものであるとされているが、ビクネルによれば、ブラウンのこの主張は以降の半世紀の間のピクチャレスク美のパターンとなる重要なものだったのである (Bicknell 24) ³。若き日にブラウンを家庭教師としていたピクチャレスク趣味の大御所ギルピン (William Gilpin) は、「ピクチャレスク」という語の定義を、“a term expressive of that peculiar kind of beauty, which is agreeable in a picture” (Essay on Prints, xii)、即ち「絵のように美しい」としたが、その基準となった絵は上記の三人の画家による17世紀イタリアの風景画であったのであり、これらの風景画を中心に18世紀の後半になってピクチャレスク趣味は高まってゆくことになる。ブラウンの作品は、このようなツーリズムの流れを生み出す出発点となったのである。

ベラーズは1枚 (1景) 1ギニーとまだ高価だった

ため、また、あとの2作品はプライベートな色彩が強かったため、あまり多くは売れなかったものと思われる。しかし、このあと湖水地方へのツーリズム熱を高めた決定的な作品が出るが、それはトマス・グレイによる日記である。1769年の湖水地方への旅行の際、途中で病により旅の続行を断念した同行の友人に報告する目的で書かれたグレイの日記は、彼の死後1775年に詩作品と共に出版されたが、時代を代表する詩人であったグレイが描いた理想的な田園としての湖水地方の描写は、それを読んだ多くの人々をこの地方に引き付ける要因になった。グレイがその中でグラスミアの様子を描いた

Not a single red tile, no flaming Gentleman's house or garden-walls break in upon the repose of this little unsuspected paradise, but all is peace, rusticity, and happy poverty in its neatest most becoming attire. (Gray, Letters 3 Jan. 1770)

という「全てが平和」な「楽園」観は、「幸せな貧困」という表現が示しているように、ある面では現実の村人の苦しい生活を見ない、一時的な滞在者、あるいは通過者の側の都合のよい誤解を生むものともなったと言える。そもそもピクチャレスク趣味は、その原点からイタリア風景画に似たイギリスの眺望を距離を隔てて鑑賞するという類のものであり、現地の住人は無視されるか、たとえ描かれても風景の中のひとつのオーナメントとして捉えられており、ツーリスト達が現地の人々と交わってそこから何かを得るというような発想は無かったと言ってよい。グレイの日記からの引用文は、このような当時のツーリズムの持つ傾向を示しているのである。

3

オックスフォード英語辞典によれば、「ガイドブック」(“Guidebook”) という言葉の初出は、1823年出版のバイロンの『ドン・ジュアン』(Don Juan 11. 23) であるが、今日我々が言うところのガイドブックに相当するものはイギリスにおいてはすでに18世紀に出現していたと言える。その初期の例として、すでに言及した世紀半ばの萌芽期の作品が発展したものであると言える、トマス・ウェストによる『湖水地方案内』(Guide to the Lakes, 1778) が挙げられる。これは「ガイド」(“Guide”) という言葉を初めてタイトルに使ったもので、グレイの日記などの付随的資料を取り込みながら、本人の死後も1821年まで11の版を重ねた当時のツーリストにとってのベスト・セラーであった。その内容は極めてシンプルであり、主要な湖から「ピクチャレスク」な風景が楽しめる場所に「眺望点」

（“station”）という名称を与え、見て回る順番を定めた上でそれらに各々番号をつけて、どうすればそこに辿りつけるのか、そこからどのような眺望が見られるのか、などについて詳しく解説したものであって、そのポリシーは非常にはっきりしている。このガイドブックが何度も版を重ねたのはその実用性ゆえと容易に推測できるのであり、この事実は18世紀後半に流行したピクチャレスク・ツーリズムの本質を明確に表している。つまり、彼らが追求したのは眼前にある直接の風景ではなく、想像力によってその背後に創造された彼らにとっての理想的な「絵画的」眺望であったと言えるのであり、本物の自然に彼らが引き付けられたのではなかった。多くのツーリストが、いわゆるクロード・グラス（Claude Glass）を使って、見ようとする風景に背を向け、その鏡に映った姿を額縁に入れた絵のように鑑賞していたという事実は象徴的であると言えるだろう。

このようなピクチャレスク・ツーリズム熱を実践と理論の両面から支えたのが、先に触れたギルピンである。1769年から1774年にかけてギルピンはイギリス各地のピクチャレスク美の見られる地域を回って数多くの紀行文を地域ごとにまとめて出版したが、その中で湖水地方に関わるものは1772年のツアーの経験を書きとめた『湖水地方のピクチャレスク美の観察』（*Observations on Lakes of Cumberland*）である。この作品の出版は1786年であるが、それまでもウェストの作品と共に一種のガイドブックとしてプライベートに広く読まれていた。湖水地方出身のギルピンは、ツーリストのグレイとは異なり地元住民の生活の厳しさにも触れているが（Cumberland 165）、グラスミアの風景を「盗賊（Banditti）が身を潜めているようなローザの絵にふさわしい恐ろしい」ものであると表現するなど（Cumberland 166-7）、その風景描写は一貫してピクチャレスク趣味の視点からのものであり、その根底にあるのは『ワイ河の観察』や『ピクチャレスク三試論』などにおいて彼が展開しているピクチャレスク理論である。

The following little work proposes a new object of pursuit; that of not barely examining the face of a country; but of examining it by the rules of picturesque beauty: that of not merely describing, but of adapting the description of natural scenery to the principles of artificial landscape; and of opening the sources of those pleasures, which are derived from the comparison. (Wye 1-2)

ギルピンは紀行文執筆の目的をこのように説明しているが、風景の「吟味」の「基準」となる「芸術に描か

れた風景の原則」とは、クロード・ロランら三人の画家の風景画を念頭においたものである。ギルピンは「ピクチャレスク美のルール」の基準に基づいて眼前の風景を「吟味」し、さらに、

... we examine what would amend the composition; how little is wanting to reduce it to the rules of our art; what a circumstance sometimes forms the limit between beauty, and deformity. Or we compare objects before us with other objects of the same kind: — or perhaps we compare them with the imitations of art. From all these operations of the mind results great amusement. (*Three Essays* 49)

というように、芸術作品、即ち、その「ルール」の模範となった3人の絵画と「比較」することによって、「ピクチャレスクな風景」と言えるかどうかを、全体の「構成」や「美醜」の観点から「判断」し、そのことによって「大きな楽しみ」を手に入れることが出来る、としている。これらの引用文が明らかにしているように、当時のツーリスト達が関心を持っていたのは風景の表層（“face”）であり、しかも彼らは主観的に風景美を楽しんでいたのではなく、与えられた「規準」に照らし合わせながら理想的風景を追求していたと言える。即ち、彼らは何かの拠り所がなければ自然と直接対峙することができなかったのであり、彼らにとって自然（Nature）よりも人工、或いは芸術（Art）の優位は明らかだったのである。

4

湖水地方への旅行熱がやや冷めかけた1800年に出版されたものに、ハウスマン（John Housman）による『湖水地方の描写と案内』（*A Descriptive Tour, and Guide to the Lakes, Caves and Mountains*）がある。この直前の1799年12月にはワーズワスが故郷である湖水地方グラスミアのグヴ・コテッジに帰還して詩の執筆を始めており、ピクチャレスク趣味は終焉して時代はロマン派へと入っていった頃である。ハウスマンの『湖水地方の描写と案内』はウェストの影響が強く感じられるが、ウェストのほかにも先達によるガイドブックからの引用が多い。その上、一貫して作者が自分の個人的な意見を表明することを控えるように努めている感が強い。こういった特徴は、ハウスマン独自のものではなく18世紀から続いているものであるが、ハウスマンの作品は特にこれらの点が際立っているように思われる。全体を通して、主観的記述より描写の正確さや客観性が重視されているのがこの作品の特徴であり、その点においてこの『湖水地方の描写と案内』は、以降のガイドブックの一つの指標になっ

たものであると言える。ただ、人気のなかった湖水地方の西部の湖について触れていないのは18世紀から相変わらずであり、付録の地図に関しては正確さを欠くなどの不完全さも認められる。

19世紀にはいつて湖水地方のガイドブックが新しい時代に入ったことを示す画期的な作品に、グリーン (William Green) の『新・湖水地方案内』(*The Tourist's New Guide, containing a description of the Lakes, Mountains, and Scenery, in Cumberland, Westmorland, and Lancashire*, 1819) がある。グリーンはハウスマンの作品が出た1800年に湖水地方の中心地のアンブルサイドに移り住み、以後20年近くに渡ってこの地方の隅々まで歩き回り、1000ページ近いこの大書を書き上げた。ウーズビーは各々独立していた様々な要素を統合しながらガイドブックという新しいジャンルが成立していったと述べているが⁴、グリーンは『新・湖水地方案内』の内容は極めて多岐に渡り、数多くの前作が持っていた特徴を包括的に統合した、湖水地方の全域をカバーした総合的な案内書であり、その意味でウーズビーの言うところの初期ガイドブックの集大成であると言える。

18世紀のガイドブックとは異なるグリーンは作品の重要な点をいくつか挙げると、まず第1に、ギルピンらとは逆に、人工、或いは芸術よりも自然を優位において考えていることが挙げられる。グリーンは、時間 (time或いはage) と偶然 (accident) が自然に働きかける作用を重視し、それによって出来上がった風景こそが真の意味で美しいという主旨のことを随所で主張しており、そこには現代のエコロジー思想の萌芽が認められる。この主張に沿って、18世紀後半以降、湖水地方のあちこちで起こっていた森林伐採や、それに伴う植林行為が、風景美が損なわれるという視点から非難される。植林される木の種類に関しても、特に落葉松 (larch) が、“spike headed”や“offensive in their forms”、“sooty blackness”(Green 1 439) などという言葉を使って多くの箇所でも激しく批判されているが、その根底には「在来種」ではない「外来種」を人間の都合で導入することは「自然」の流れに逆らうことであるという発想があると考えられる。この主張は『湖水地方案内』でのワーズワスに引き継がれているものであり、人間にとっての有用性 (“utility”) をより尊重する立場から落葉松などの植林を擁護するハウスマンらとの相違は明らかである。第2の重要な点は、18世紀以来進行してきた産業革命がこの地域の住人の生活に及ぼしている影響についてグリーンが語っていることである。彼は表層的な風景美を越えて、その中に住む人間にまで目を向けているのであり、産業革命がイギリスの奥地のこの地方にまで及び、長年続いてきたその村落共同体社会を崩壊させかけている事態について憂慮しながら、そのこともツーリストが知って

おくべき情報としてガイドブックの中に含めているのである。さらに、見落としてはならない点として、上記のような自然破壊や地域の共同体社会の崩壊をただ描写しているのみならず、彼はどのようにすれば現状が改善 (“improvement”) できるのかについての提言をしていることにも注目したい⁵。一例を挙げると、グラスミアの地主たちに対してグリーンは、伐採をやめて単調な植林を避け、有用性とのバランスも考慮しながら、人間の「意図」 (“design”) ではなく「偶然」の効果によって多様な木々により森林美を作り上げるべきであると主張している (Green 1 264-6)。また、ケズウィック郊外、グーヴェント湖近くにあつて殆どの木々が伐採されてしまっていたグリニッジ・ホスピタル (Greenwich Hospital) の広大な所有地については、20世紀の田園都市構想にも匹敵すると思われる住民の生活環境を重視した大規模な改良計画を提案している (Green 2 482-506)。また、ツーリスト自身が、自らが楽しむべき自然環境を破壊してしまう可能性についてグリーンがそこそこで指摘していることも興味深い。グリーンがこのような新しい視点で風景と接することができたのは、彼が住民としてその地域にとけ込んでいたこととも深く関わっていると考えられ、そして、自分と同じような目で自然を見るために、馬車から降り主要道路からはずれて脇道に入り込んで自然と交わることを、その「序文」で彼は薦めている。この点においても、距離を置いた「眺望点」から風景を絵のように眺めることを前提としていたウェストとの違いは明瞭であろう。

大部すぎて実際の旅行に持って行き難いというグリーンはガイドブックの持つ欠点を補うべく書かれたのが、オトリリー (Jonathan Otley) の『イギリス湖水地方の簡略ガイド』(1823) である。この作品は、そのコンパクトさや情報の簡潔さゆえに1849年に至るまでに8版を数えるウェストのあとを引き継ぐベスト・セラーとなった。著者のオトリリーは、他のガイドブックとは異なり自分の著書はピクチャレスク趣味の影響を受けていないとは主張しているが、必ずしもそうは言えず、持ち運びやすさの他に内容的には際立った目新しさは見当たらない。しかし、注目すべき点として、気象学と地質学について、またボロウデイル (Borrowdale) の黒鉛鉱山についての専門的な内容についてのセクションが設けられたことが挙げられるが、このことは近代科学の発展がガイドブックに明らかな影響を及ぼし始めたことを物語っている。

次に取り上げるべきは1835年に決定版が出たワーズワスの『湖水地方案内』であるが、この有名な作品についてはベイツら多くの批評家が言及しているので、ここでは簡潔に触れるに留めたい⁶。著者の知名度ゆえによく読まれたワーズワスのこの作品に関して特筆しておくべきは、1) これはツーリストのための実際の

なガイドというよりも、著者の地域観、自然観を表明した読み物であるという面が顕著であり、また自らの自然観を読者に教育しようとは彼は意図しているということ、2) 表明されている著者の自然観の中には、外来種の植林を批判したり、建築物の建材を地域産のものに限定したり、地域全体をエコシステムとして捉えたり、といったエコロジック的発想が明瞭であること、などであろう⁷。ワーズワスにおいても、発想の原点は「自然美とは何か」ということであって、例えば彼が外来種の落葉松の植林を批判するのは、様々な種類の、様々な年齢の木々の作り出す風景美の調和を、その単調な景観が壊すからに他ならない。また、この作品では、マッジ (Colonel Mudge) による新しい地理学の知識が導入されているし (Wiley 152-64)、1842年以降の新しい版では、当時の地質学の第一人者であったセジウィック (Prof. Sedgwick) の書簡が版ごとに書き換えられて添えられ、ガイドブックのジャンルが近代科学の発展と歩みを共にしていったことも教えてくれる。

5

ワーズワスの主張の流れを受けて、湖水地方のガイドブックの発信する「自然保護」というメッセージがより明確になり、実際的な環境運動とも関わっていったことを示す最初のものは、1880年に出たバドリー (M. J. B. Baddeley) による著書であろう。国内ツーリズム網の完備と共に *Thorough Guide Series* の最初の巻として出版されたこのバドリーのガイドブックは、版を重ねながら *A Ward Lock Red Guide* の一冊として現代なお出版され続けている影響力の強いものであるが、その特徴は、それが自然環境の保護という目標を前面に出して書かれているという点である。著者のバドリーは、間もなく創設されるナショナル・トラストの前身であり、1895年にナショナル・トラストをも創設したローンズリー牧師 (Canon Rawnsley) が主導した Lake District Defence Society の当初からの重要なメンバーであった。そのガイドブックの中で、バドリーは Lake District Defence Society の存在を広く知らしめようとしているが、興味深いのは創設時のメンバーのリストがその中で紹介されていることで、メンバーの殆どの住所はロンドンなど湖水地方以外の都市部になっていることから、バドリーの主張する湖水地方の自然保護は地元在住の人々のためというよりも、そこに保養に出かける富裕層のためであったという一面も否定できないと想定できる。

ただ、結果的に自然保護の視点を持ったバドリーらのガイドブックやナショナル・トラストなどの活動が、それから100年の間、この地域の景観を守ることになったということも重要な事実であろう。バドリーの名で今日なお発刊されている版の「序文」には「景観の保

護」という項目が置かれており、そこではローンズリー牧師と協力者の思想家ラスキン (John Ruskin) を始めとして、20世紀を通して湖水地方の自然保護に貢献してきたいくつもの団体など (Fell and Rock Climbing Club, Lord Leconfield, Lake District Safeguarding Society, Country Councils, Friends of the Lake District, National Park, Nature Conservancy) の名前が挙げられ、Lake District Defence Society やナショナル・トラストによって始まったこの地域の自然の保護活動の意義が強調されている。ワーズワスが、1844年に湖水地方の入り口に当たるケンダルとウィンダーミア間の鉄道施設に自然破壊阻止の立場から反対した時も、その反対は鉄道によって安価に保養が可能となるマンチェスターなどの貧しい労働者のためではなく一部の富裕層のためであるという非難があったが、「誰のための自然保護か」という問題に対する答えの変化は、ツーリズムに関わる階層の広がりを示していると言えるだろう。

この地域を守り続けてきたナショナル・トラストとの結びつきにおいて重要なもう一つのガイドブックは、ブラバン (Brabant) によるものである。1902年に初版が出たこのガイドブックは、戦後の1952年の第4版の際にナショナル・トラストのトンプソン (Bruce Thompson) によって改訂された。その中でブラバンやトンプソンの「ピクチャレスク」という語の使い方は18世紀のガイドブックと殆ど変わっておらず、風景美に関する考え方の基本に200年間変化がないことがわかるが、一方でトンプソンは「序文」の中で、

… the valleys are noisy with motor cars and motor cycles, the mountains are swarming with hikers and fouled by litter, and the scenery is regimented into formal lines by State Forests and private gardens. (Brabant 4)

と述べており、現在の湖水地方が直面している諸問題が当時、早くも進行していたことを明らかにしている。そして彼は、ナショナル・トラストが設立間もなかったナショナル・パーク当局と共に環境破壊を防止することを強く訴えているのであるが、これは自然環境を守るには理念だけではなく、実際的な力を持った大きな組織の活動が必要になっていたことの現れであると解釈できるだろう。

6

戦後になってから出たベスト・セラーで、今なお版を重ねているガイドブックに、ウェインライト (A. Wainwright) の7巻のシリーズがある。その記述は実際の情報の詳細に徹しており、専ら山歩きのためだけのガイドになっている。その文章・イラストは共に極

めて精巧で、全て著者自身の手書きであるが、これは何事も機械化されてしまっている現代において、手仕事の意義が今、見直されていることを示していると思われる。その後、数え切れないほどの山歩き、谷歩きのコースガイドの他、ドライブや乗馬コースガイド、湖水地方の各地域のターン(小湖)、道、パブ、ティールーム、文学ゆかりの地の紹介、ファーム・ステイガイド、等など、湖水地方に関しては夥しい数のガイドブックが出版されている。このようなガイドブックの多様さは、ツーリストのニーズの多様化を反映していると言えるだろう。しかし、情報がもはや古くなっているにも拘わらず、ウェインライトのガイドブックが未だに最も人気のあるガイドブックの一つであることが示しているように、この地を訪れるツーリストの主たる目的は自然美に触れることであり、これは湖水地方の250年のツーリズムの歴史の中で変わってはいない。産業革命によってこの地で盛んに行われた鉱山開発や、その産業革命によって富を得た新興中産階級によるツーリズムや別荘開発、さらには19世紀に入って彼らのもとでのわずかなレクリエーションを求められる程度に豊かになったマンチェスターなど近くの大工業都市に出現した労働者階級によるマス・ツーリズム、そしてマイカーによる戦後の旅行ブーム、18世紀から今日にかけてのこのような大きな動きのただ中で、湖水地方は自然破壊の危機にさらされ続けて来た。クロード・ロランからナショナル・トラストへ、即ち、風景の絵画的「表層」美の追求から環境保護を強く意識したエコ・ツーリズムの舞台へ、湖水地方をめぐるガイドブックの、そしてツーリズムの歴史は、イギリスにおける自然観の流れを反映して来たのである。

注釈

1. 18世紀におけるツーリズムの興隆を支えていたのは新興の富裕層であり、ツーリズムが労働者階級をも含む全ての人々に普及してゆくのは、禁酒運動を支援するためにトマス・クックが世界で初めての団体旅行を実現する19世紀半ばまで待たねばならない。
2. 18世紀の湖水地方には、鉛筆の材料になった黒鉛を始めとして多くの鉱山が開かれた。現実には、その鉱山のもたらした環境被害は小さくはなかったと考えられるが、ギルピンは鉱山のある風景を美しいと描写している。
3. 風景詩においては、この三人の画家の名前は、もう少し早く、イタリアに留学したジェイムズ・トムソンの1748年出版の『怠惰の城』(*Castle of Indolence*)の風景描写の中の“Whate'er Lorraine light-touched with softening hue, / Or savage Rosa dashed, or learned Poussin drew.” (1 38)にすでに登場する。「柔らかな色合いの軽いタッチ」や「荒涼とした」、「博識の」といった言葉の中に、各々の画家の持つ三種類の特徴が区別されて描き出されている。
4. ウーズビーはガイドブックの成立の事情を、カントリー・ハウス詩から発展したカントリー・ハウスのアート・コレクション・カタログや廃墟趣味から興ってきた考古学的研究書、地誌詩から発展したピクチャレスク風景詩、などをツーリストたちが一つにまとめるという形でガイドブックが成立していったと述べている。(Ousby 12)

5. “improvement”という言葉は、18世紀後半に風景式庭園が大流行した際、その立役者となったブラウン (Capability Brown)が、それまでであった木々を伐採して広大な芝生の広がる庭園を造ろうとする時に盛んに使ったものである。グリーンは、それに反対する立場から意図的に同じこの言葉を使っていると想定できる。
6. Cf. Bate, 41-49.
7. ワーズワスの『湖水地方案内』は、エコロジック的自然観など少なからぬ点においてグリーン作品の影響を受けていると言える。

参考文献

- Baddeley, M. J. B. *The Thorough Guide to the English Lake District*. London, 1880.
- Bate, Jonathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. London, 1991.
- Bellers, William. *Six select views in the North of England*. London, 1752.
- Bicknell, Peter. *The Picturesque Scenery of the Lake District*. Hampshire, 1990.
- Brabant, F. G. *The English Lakes*. London, 1823.
- Brown, John. *A Landscape of the Lake at Keswick in Cumberland*. London, 1767.
- Dalton, John. *A Descriptive Poem, Addressed to Two Ladies, at their Return from Viewing the Mines near Whitehaven*. London, 1755.
- Gilpin, William. *Observations on the River Wye*. London, 1782.
- . *Three Essays: on Picturesque Beauty; on Picturesque Travel; and on Sketching Landscape: to Which is Added a Poem, on Landscape Painting*. London, 1792.
- Green, William. *The Tourist's New Guide, Containing a Description of the Lakes, Mountains, and Scenery, in Cumberland, Westmorland, and Lancashire*. London, 1819.
- Housman, John. *A Descriptive Tour, and Guide to the Lakes, Caves and Mountains*. London, 1800.
- Otley, Jonathan. *A Concise Description of the English Lakes, and Adjacent Mountains*. Keswick, 1823.
- Ousby, Ian. *The Englishman's England*. Cambridge, 1990.
- Thomson, James. *The Castle of Indolence: an Allegorical Poem*. London, 1748.
- Wainwright, Alfred. *A Pictorial Guide to the Lakeland Fells, Being an Illustrated Account of a Study and Exploration of the Mountains in the English Lake District*. 7 Vols. London, 1972.
- Wiley, Michael. *Romantic Geography: Wordsworth and Anglo-European Spaces*. London, 1998.
- Wordsworth, William. *Select Views in Cumberland, Westmoreland, and Lancashire*. London, 1810.
- . *Guide to the Lakes. The Fifth Edition*. Ed. E. de Selincourt. 1835. Oxford, 1977.